虫送り ― 蓑村（みのむら） ―

　むかしむかしのことです。

「ゆうべも火の玉がでたとな。」

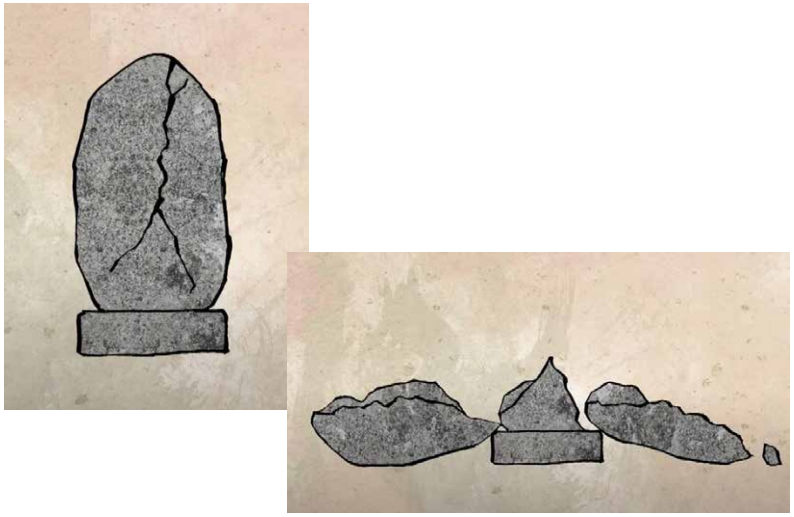
「わしゃこわぁてな。オーイと聞こえてくるから、振り返っておじぎしたらスゥーと消えてしもうた。」

　震えた声で語る村人の話は、次から次へと伝わり、村中おおさわぎです。

　村人の話によると、火の玉が出るというのは、鳥墓（とつか）神社から南へ二〇〇メートルほどの浮塚（うきづか）あたりということです。

　村人たちはすっかり怖がり、田の仕事も早々に切り上げ、夕暮れになるとだれも外へ出ようとしませんでした。

　ですから、その年は多くの害虫被害にあい不作（ふさく）でした。



そこで、こんな奇妙な塚は取り壊わした方がいいと、その土地の持ち主が壊わしてしまったのでした。

すると不思議なことに、その持ち主が一週間もしないうちに、ポックリ死んでしまいました。

村人たちはあわてました。

「やはり、あの塚はなにかあったんや。」

「これはタタリや！」

といい供養をはじめたのでした。

あたりが暗くなったころ、村人たちは火の玉の恐しさも忘れ、一団となって松明（たいまつ）（麦ワラで作った直径一五センチ長さ二、三メートル）に火を灯し、まるで火の玉を追い払うかのように、太鼓、ホラ貝、鉦（かね）をならし、ツーツーワイワイとあぜ道を歩き回り、祈禱（きとう）したのでした。

すると、松明のあかりについてきた害虫が焼かれ、その年はたいそう豊作だったのです。

それからは毎年、稲が成長するこの大切な時期に、松明の火を利用して虫送りの行事が行なわれるようになったといわれています。

キーワード：みんわ、蓑村、虫送り、農業、お祭

このお話は、昭和56 年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。